四つの季節の鉄道ものがたり 冬

中書島のモラトリアム

津村記久子

大学が京都にあって、電車は阪急電車を使っていたので、京都に遊びに行く時はだいたい阪急電車に乗るイメージがある。一緒に遊びに行く友人との待ち合わせも、梅田の方が便利だ。なので京阪電車には大学を卒業するまで一度も乗ったことがなかった。

わたしには京阪は謎の電車だった。「テレビカーがあるらしい」「二階建てだったりするらしい」。「京阪乗る人おけいはん」というCMの文言にぐっときつつも、乗る機会がないまま長い時間を過ごしていたのだが、ある時思いがけない事情で毎日のように京阪の特急に毎朝乗る事態になった。勤めていた会社の出向で、中書島に仕事に行くことを言い渡され、九月の半ばから、わたしはある工場で検品の仕事に従事することになったのだ。

わたしに出向を言い渡した元の職場では、毎日苦しんでいた。配属先がなかなか決まらず、誰が自分に仕事を教えてくれるのかも判然とせず、何を誰に訊いたらいいのかもよくわからず、ある程度ちゃんと振る舞ってくれた先輩は次々やめていき、のちにパワハラでわたしの心を折る上司が、毎日のようにフロアで怒鳴り散らしていた。あの人のところに配属されたらつらいなと思っていたらその通りになったのだが、それはまた別の話で、とにかく職場では陰鬱な状態にあった。

なので出向先の工場は、もちろん仕事をしなければいけないにしろ、天国のようなところだった。一日中決まった仕事があるし、休憩時間もちゃんと取れるし、よそものだからか一緒に働いていた人たちは優しかったし、誰に何を訊いたらいいのかもはっきりしていた。元の会社に行くより通勤時間が長くなったことなどどうでもよかった。

何よりも、特急で毎日京都に行くのは楽しかった。それまで京阪に乗ったことがなかったから、車窓の風景は見慣れないものばかりだし、京阪の車両にはそこはかとなく「旅行」の空気が漂っているので、もう自分は元の職場には戻らず、このままあの工場にずっ

イラスト・岡林玲

みんてつ

CONTENTS
Vol. 68
2019

◎日本民営鉄道協会とは？
昭和 42 年に社団法人として設立、平成 24 年 4 月 1 日付で一般社団法人に移行、73 社の民営鉄道会社で組織されています。
輸送力の増強と安全輸送の確保を促進し、鉄道事業の健全な発達を図り、もって国民経済の発展に寄与することを目的とした活動を行っております。
なお、JR 各社や公営地下鉄などは加入しておりません。

02 四つの季節の鉄道ものがたり　冬
◉作家　津村記久子

特集／地方鉄道の経営努力と公的支援
［地域の活力を支える三岐鉄道　三岐線・北勢線］

04 TOP INTERVIEW
地域のまちに貢献する
鉄道を維持する経営努力
◉三岐鉄道株式会社　取締役社長　日比義三

08 CHRONICLE
「鉄道のあるまち」を次世代につなぐ
三岐線・北勢線の歴史

10 REPORT
鉄道の多様性と他の交通との共生で
地方鉄道を存続する
◉三岐鉄道株式会社　取締役 鉄道部長　雨澤隆生
◉特定非営利活動法人 貨物鉄道博物館　常務理事　南野哲志
◉いなべ市 都市整備部次長 交通政策課長　小林治夫
◉いなべ市 都市整備部 交通政策課 主事　奥岡孝将

15 INTERVIEW COLUMN
新生・北勢線の誕生まで
◉三岐鉄道株式会社 専務取締役 鉄道統括　種村尚孝

18 基調報告52
人口減少・高齢社会における
地方鉄道存続のために
―三岐鉄道北勢線の現状をケーススタディにして―
◉四日市大学 学長 総合政策学部 教授　岩崎恭典

22 TOPICS
公有民営方式で歩む
四日市あすなろう鉄道
◉四日市あすなろう鉄道株式会社
鉄道営業部 次長　大藪 淳
◉四日市あすなろう鉄道株式会社
鉄道営業部 運輸課 運輸管理所長　山上雅人

24 みんてつ探訪
三岐鉄道・太平洋セメント　密着レポート！
「資源循環」の輪をつなぐ
三岐線貨物輸送
◉太平洋セメント株式会社 藤原工場 製造部 製造課　田中 博
◉三岐鉄道株式会社 鉄道部 運輸課 係長　園田 亮

28 連載35 地方民鉄紀行
北大阪急行電鉄株式会社

30 連載45 大正・昭和の鳥瞰図絵師 吉田初三郎の世界
京王電車沿線名所図絵
◉元首都大学東京非常勤講師　藤本一美

といたい、と思うようになっていた。そしてその一か月半後、わたしは会社に戻され、さらに三か月後に会社をやめた。

今では京阪をよく使っている。友達の行きつけの服屋さんが交野市にあったり、ときどき話をするために呼ばれる京都の大学が出町柳を経由したりするので、年に十回ぐらいは乗る。交野市に行く時は遊びでいつも楽しいけれども、大学で話をするのは仕事だし、出町柳で降りた後からも長いので、ちょっと憂鬱な気分で乗っている。どちらにしろ、出向していた時の、宙吊りでありながらここから抜け出したくないという不思議な思いはない。

中書島には出向していた時から一度も降りていない。しかし停車すると寝ていても必ず目を覚ます。あの時から本当に遠くまで来たなあと思う。あるいっときは失望していても、時間を過ごせば物事は変わることの象徴が、わたしには中書島の駅のホームだ。

つむら きくこ
作家。大阪府生まれ。2005年「マンイーター」（単行本化にあたり『君は永遠にそいつらより若い』に改題）で第21回太宰治賞を受賞しデビュー。08年『ミュージック・プレス・ユー!!』で第30回野間文芸新人賞、09年「ポトスライムの舟」で第140回芥川賞、11年『ワーカーズ・ダイジェスト』で第28回織田作之助賞、13年「給水塔と亀」で第39回川端康成文学賞、16年「この世にたやすい仕事はない」で第66回芸術選奨文部科学大臣新人賞、17年『浮遊霊ブラジル』で第27回紫式部文学賞を受賞。著書に『カソウスキの行方』『ポースケ』『エヴリシング・フロウズ』ほか多数。近著に『ディス・イズ・ザ・デイ』がある。